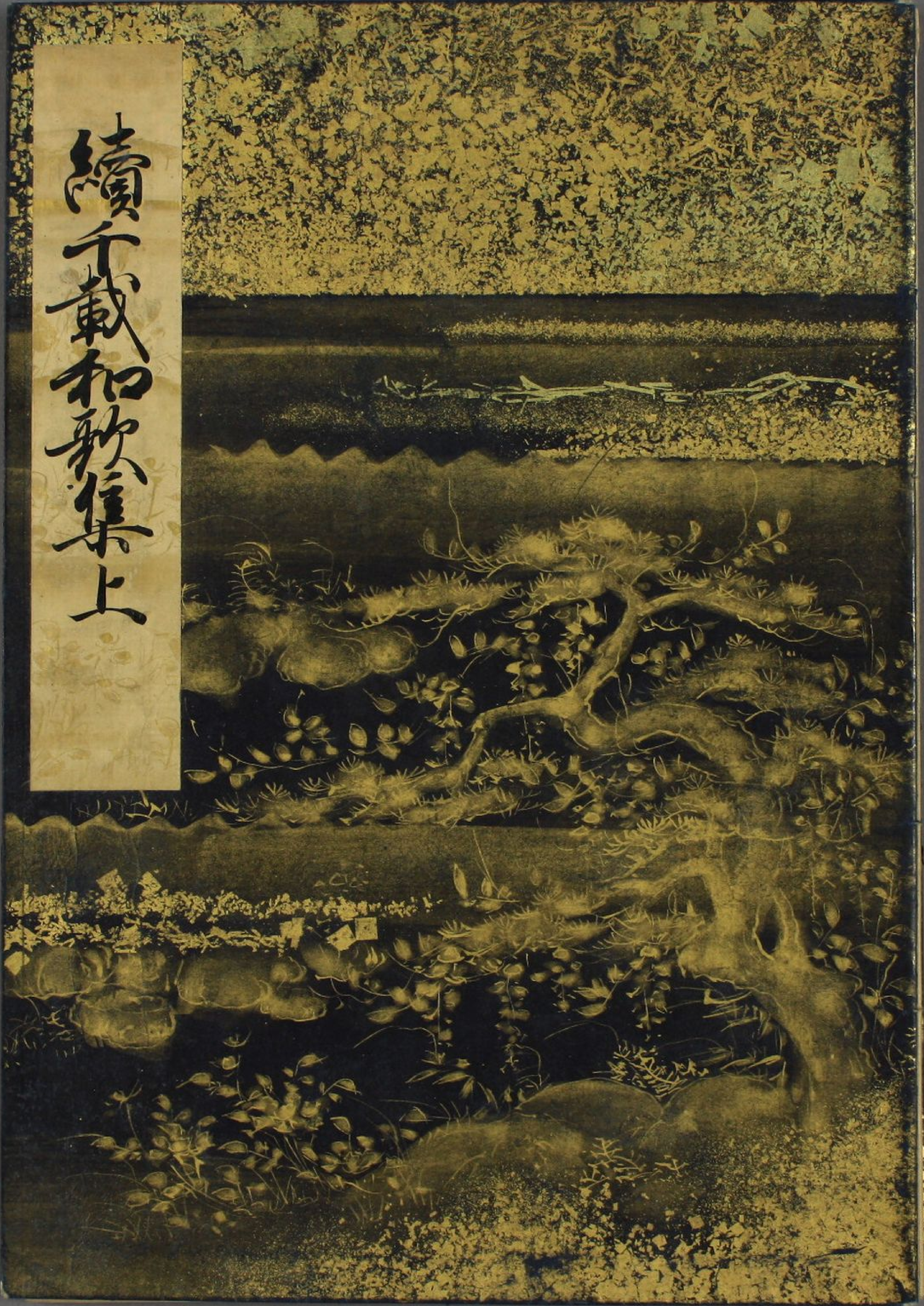
續千載和歌集 上



[illegible]陽文庫

續千載和歌集巻第一

春哥上

春たつこゝろをよみ侍ける

前中納言定家

出る日のおなし光によもの海のなみにもけふや春はたつらん

嘉元々年百首哥奉りし時

入道前太政大臣

をさまれる代の初とや今日の春は雲の上よりそのとかなれ

はしめの春の心をよみ侍ける

法皇御製

山川の氷もとけて春風にのこるあちゆくの白浪

弘長元年後嵯峨院に百首哥奉りける時

前大納言為家

立かへり春はきにけり浪やおなしきさとく志賀の浦風

常盤井入道太政大臣

朝日さす峯のものとかに霞みて春の色やこえん

影しらす

土御門院御製

みよし野の山もかすみや朝日の松に霞まつ春ぬる春はみえけり

順徳院御製

あらたまの年のはしめの霞をみけて春はきにけり

鴬乃なくしめてなくなとさて

郁芳門院安藝

鴬乃鳴ねやそてつきけん霰にしも春ときこゆる

難しらす

凡河内躬恒

春のたつ日に鴬の初こゑを鳴て雉にはまさきなさらん

三條右大臣家乃屏風の

紀貫之

春あさくてねの日に為かならもまていつまも人のなをすさん

千五百番歌合に

前中納言定家

山里ハ花の鴬こらのふきさ雲よりふるころそれふり哉

春乃詞の中に

千すら山ふ乃朝日の春の色に花乃鴬しや出けん

位よれれよしくけれ時ら人のあのこれ鴬乃声つくりまつりきゝけのくにによませ給ひける

亀山院御製

花にひかれ梅のたちを出て鴬の初こゑさく時そ春はきくらん

おなし心を

今上御製

かくもと空はたちて春の色をかすのはねのこと鴬そ鳴

百首哥めされしついでに

法皇御製

あかねさすそらにかほれる梅の花もろこしまての鶯の声

建保三年内裏の百番哥合に

八条院高倉

鶯のふるさとにまたこゑもせし梅さく宿をまちてとはなん

題しらす

源道済

けさきけは春きにけらし我宿のかきねの梅に鶯のこゑ

延喜御時御屏風に

躬恒

梅かえにきゐる鶯はるかけてなけともいまた雪はふりつゝ

千五百番哥合に

惟明親王

梅か香はさそふ都の春にとめてみん花によそなる風のをとまて

題しらす

道因法師

梅かえにふりつむ雪のたえまにはあやなく花の数まさりける

正治二年後鳥羽院に百首の哥たてまつりける時

後京極摂政前太政大臣

かをとめし軒の梅かえ小宿してまちこそわかぬ鶯の声

寛治二年後湊殿院に百首の哥奉りける

前大納言為氏

ところ春の宿

みなかみのかすみの日はあさみとりかすめる空も雪は降つゝ

弘安元年亀山殿にて百首歌奉りける時

入道前太政大臣

あさみとりかすめる空は春なから山かけはなを雪は降つゝ

春の雪をよませ給ける

院御製

花ならぬ梢はまたも咲やらて春とも見えぬ雪はふりつゝ

伏見院御製

春と見てまた白雪のふるさとは嵐にはらふみよしのゝ山

二月餘寒といふ心を

後二条院御製

見よみれはなを山さむしこほりとく風も雪けの残る嵐に

寛治二年人々に百首歌めしけるついてに

春雪をよませ給ける

後深草院御製

春風のふけともみ山の月影はいまたやよひの白雲

住吉社によみて奉りける百首歌の中

若菜を

前大納言為家

下もえやまつはそらん白雪はあさゝはのゝ若菜つむらむ

寛喜元年女御入内屏風に

常盤井入道前太政大臣

白妙の袖にはなをつゝみためて富士の葉の色とみるかな

雪中花葉と云ことをよませ給ひける

法皇御製

袖の上にちりかゝる雪をたちはらはてねさめよと花かつむらむ

弘安百首歌奉りける時

入道前太政大臣

花かつむ袖そぬれける春雨に春のゝ京の雪まわけて

嘉元百首歌奉りし時花を

太政大臣

いはくらを野へとなりにし日は霞さゆらくよりはなさきそむ

徳治元家の屏風に春日野にて花つみける所をよみける

大中臣能宣朝臣

あたらしき春の心とにみるきみはすみのへの花かそつむ

わかなとよめる

清原深養父

かすかにていさ春の野にまかりつゝむ花かつみとて今日もやと

弘徽殿女御歌合に

相模

春のうしはしめ京のやへ霞日をまてそ立まかりぬる

松上霞といふ心を

順徳院御製

みる世ハ霞そめけり高砂の松ハ嵐のをとはかりして

洞院摂政家百首歌に

藤原信實朝臣

高砂乃松の八ね雲乃ゆ霞たなひくくれハ春ふかかり

常盤井入道前太政大臣

春霞あさ日はさしよりつゝきやたまれ山ハよそにみえきて

春乃雨ふれ中に

前僧正道性

春ハまつ霞よこさえて時しもあれねさめともみえにしかも山

寶治百首歌たてまつりける時山霞

右大納言為氏

夜をこめてあるかに山の端霞立重てそ春をしらする

百首歌たてまつりし時

前大納言為世

旅さへ霞そめけりなにはえやあしひきの春乃曙

正治二年百首歌たてまつりけるに

後京極摂政前太政大臣

のとかなる春の光よまつ海や霞にまかふ沖の釣舟

柳を

藤原信實朝臣

春ハまたひさしみとりなるさほ姫のそめてかけたる青柳の糸

前中納言定家

あさみとり玉ぬきみたる青柳の枝もとをゝに春雨そふる

窓中梅といふ心をよませ給ける

今上御製

こゑやまとる梢の窓のひまとほしかほりまよひてぬ梅かそする

百首哥奉りし時

藤原為定朝臣

けぬかうへにふるとそみつる梅かえもまよはさる春のあは雪

春の哥の中に

九條左大臣女

梅かゝにふかれて梢の梅かえにうつる雑句ふ春のゆふくれ

二品法親王覚助

香をとめてとはれやせんと我宿の梅乃立えに春風そ吹

宝治百首哥めしけるついてに　小梅薫風

後嵯峨院御製

ともしひハ色をもみせよ梅かゝもかくれなきさよの春の春風

建長二年詩哥をあはせられ侍りける時

春望

前大納言為家

難波江や冬こもりせし梅かゝのよもにみちぬる春の初風

建保百首たてまつりける時

前中納言定家

梅の花やまかつのかけにさえまさりしつのやとにも春の奈

題しらす

よみ人不知

我宿の梅咲たりとつけやらはこてふにゝたり散ぬともよし

こゝろ有小さとに咲る梅のもちるへくなりぬらん人のため

弘安百首たてまつりける時

大蔵卿隆博

梅の香はよしやよそにも春風のたよりそふるさとの人も忘ん

弘長三年内裏にて百首歌たてまつりける時梅

花

前大納言良教

引うへしもちの秋のこすゑにもにほひおこせて春風ぞ吹

題しらす

津守国助

梅か香はゆふくれことに山のはの霞のまよりにほひ来らし

百首歌たてまつりし時

前大納言為世

梅か香は霞の関をもとむ雲ちにかりをとゝめしとゝめん

梅花の心を

永福門院

梅か香のみちくるよはのふけゆく風すむ雲ゐにほふさゆる夜

今

中文

吉野山ことしひらけて行路の峰にさかれる花の白雲

百首歌たてまつりしは

入道前太政大臣

あさちふちるゆく春をまてしはし花の里にいつの九
わきしらす

中務卿宗尊親王

宮とも花をたに見えしとみえし山と霞なけ春霞全

寛平御時后宮歌合

紀友則

春霞色のちくさにみえつるはたなひく山の花のかけかも

千五百番歌合に

後京極摂政前太政大臣

野とは山もあらしみよりにほひて春のそよ吹く風に春霞

嘉元百首歌たてまつりし時花

贈従二位為子

今よりはまつらてものの面かけに立田の山の峯の白雲

待花といふこころを

前関白太政大臣

まつ程は日数かそへてなかめつつ花のみえけり春そ久しき

源兼氏朝臣

はるのゝやまゝに咲やらぬ花よみまかりしさむらちてさん

前大納言為家

さくらもは心よりこそ先それとみえつる雲のあとなし

正治百首奉りける時

式子内親王

花ぞまつ門の松をもけふあらし空よりの梢よりはるの白雲

読しらす

和泉式部

誰にかはおりてもみせん中々に桜咲ぬと我にきかすな

鳥羽院御製

如何なれはおまゝ○くうるふまよれはもさぬ日はかなしとそ思

柿本人麿

かさにさく吉野の桜みにゆかんつまよ山りま花の盛は

千五百番歌合に

前大僧正慈鎮

桜さくころかねはさくみよしのゝ山のかひある峯の白雲

禁中盛花といふ事を

伏見院御製

桜花やさくらもりしこそのおちこちや人はまたさくらし

寶治百首奉りける時山花

山階入道左大臣

山あらしつよき山の桜はちらまほしけてみんぬとよそなるらん

百首歌たてまつりし時

権中納言公雄

たつ姫のそめし花そめの袖の色もおりはへて咲山桜かな
色しらす

法印定為

花の色をひとつにすむ山の端に雲白雲そなかめ

百首歌たてまつりし時

左大臣

山桜さきふさらにみよしのゝ花ふきかはる峯の白雲

弘安百首歌たてまつりける時

前参議雅有

山桜雲ゐそのまゝせにあまりなるものをそする

西園寺の八重桜をみてよみ侍ける

常盤井入道前太政大臣

山ふかき鶴のねくらの白雲の八重にかさなる花さかりかな

正治百首歌奉りけるとき

宜秋門院丹後

吉野山霞のうへにかゝる雲や峯の桜のこすゑなるらん

久安六年崇徳院に百首歌たてまつりける時

花の歌

皇太后宮大夫俊成

山桜咲しより空にあくかるゝ人のこゝろやみねのしら雲

家に花五十首よみ侍けるに

後京極摂政太政大臣

ためそむとしりおかる門を山家のたくふみし白雲

亀山院位におはしましける時ところの
花見侍て一えたおりてまゐらすとて
奏し侍ける　　後一条入道前関白左大臣

君かためしるしの山ちを尋つゝ老のかしらも花をみる哉

御返し　　亀山院御製

為にしるしの山ちの桜もけふこゝのへにかさしとそみる

嘉元百首歌奉りし時花

前大納言為世

ゆくさきの雲はさくらにあらはれてこえつるみねの花そかすめる

續千載和歌集巻第二

春歌下

嘉元百首歌めしけるついてに惜花

後宇多院御製

くれはしと思ふ日をとくれぬとてもまさて心さへそそふ花

西園寺入道前太政大臣家三首歌に花

下日暮といふ事を

前大納言為家

なかしとも思ひそそこれぬ日影もまよふ木の本に春はかへらぬ

題しらす

源重之女

春の日はさもこそあかれて摘むて人とみえたえてさき

藤原清輔朝臣

おもひねの心やゆきて見る人の夢にもちらぬ山桜かな

家に歌合し侍りけるに花下明月

後法性寺入道前関白太政大臣

てる月も光をそへよ春かすみて雲にもとふにみえさき

花の歌とてよませ給うける

順徳院御製

かのくと明ゆく山の桜もふりまかふ雪とそみゆる

ゆきされわさし待けるによしのの山をそそ流

かりて山人の花さく所をとよみ侍りける

徳舎右大臣

みよしのの山よりいりきん山人となりなましかは花よわくやと

山花といふ心を

修明門院

吉野山まかふ桜のいろなくはよそにやみまし峯の白雲

前大納言為氏

嵐山ふりにし花のこころまてひとふにかゝる白雲

百首歌たてまつりし時

六条内大臣

白雲はてふるゝや山高の尾のへに咲る桜なるらん

正三位為實

春やけふはつ桜咲ぬらし神代のまゝにかゝる白雲

題しらす

宜秋門院

咲よはりとやまのみね桜もかすみく雲はれそふ

百首歌たてまつりし時

権大納言経継

白雲はふもとにもわかれて吉野山ものゝかくらゆるみゆめ

題しらす

平貞時朝臣

みよし野やをのへの花にいる月は光ともなき山桜かな

前大納言俊光

かさなれる雲かとおもはれて夕日にはゆる山桜かな

百首歌たてまつりし時

内大臣

花の色はなかめて夕やそれとなく山寺の入相の鐘の声ぞ聞ゆる

題しらず

邦省親王

うつさや雨の後の霞立こめてよそにもみゆる花の色かな

嘉元百首歌たてまつりし時花

入道前太政大臣

山桜ものゝかなたの匂ひさへ春と立そふは霞なりけり

百首歌めしてたてまつりし時花

二品法親王覚助

咲けは花はそれともみえわかて霞にまよふ白雲

花の歌の中に

津守国助

みやま木のこずゑの桜咲ぬらし枝よこたはるくもとみえけれ

建治二年三月歌合に

左大臣

月雲をいとひむかしの人のみし桜よりそ霞みて

南殿の桜を左府より人々給ひける時大内の花

の香になくなく給はりしを

左近大将冬教

いにしへの雲井の桜移し植ゑは又春にあふ世そしらるゝ

百首歌よませ給ひし時

前関白太政大臣

りしさやみゆれもハいかにいつまて梅の匂ひぬらん

春の花を

法皇御製

春ことに昔なからに咲もハあれと世の春をとふひらん

今上いまたかんこてれ家にわたらしゝ時講せられ侍りし五首歌の中に花

権中納言為藤

行波やさかのふるさと陰まつをいて世の栄ゆくさきかなん

五十首歌よませ給ひけるに

後鳥羽院御製

花春ふしのぬ春のふるきに昔かけて春風そふく

故ての花とふとくと

入道二品親王性助

こゝみ捨しわか春ころをさそふれハもかりてそ昔なりけれ

花歌の中に

源兼氏朝臣

風てそゆく昔の春の匂ひけふまてたちの花のしら雲

天徳四年内裏歌合に桜

中務

年ことにさきてまちみる桜も家も今はあるしなくして

堀河院御時中宮の御かたにてかはらけとり
て花紙おりにつけて御前よりあまた
つかはしよませ給ひけるによめる

源俊頼朝臣

吹風といとひてのこるすゑ花の雲の上まてさけはまし
散しらす

平宣時朝臣

いまそしるとしもへにける山桜花にもおしきは命なりけり

前大納言為家

むかしそてあさむむかしよりやみよの山さくら世におもひしらるゝ

弘安百首歌たてまつりけるに

安嘉門院四条

いにしへの人とかよひし庭なれはとはれしなをもとひこそすれ

藻壁門院少将

よしの山世にもちりし桜花見る人ことに何同し色

よみ人しらす

なかめつる花のあるしのことしらは人の心の色をいかてたのまん

白河の花見んとて侍さる日よみ侍ける

権大納言長家

あちきなくいさまたゆかむ山桜花の匂ひはわすれかたさに

題しらす

白河院御製

みねつゝき匂ふ桜をしをりにておくまてやまの春をみてし

左京大夫顕輔

おふむとていくとせおもし山桜花のまれにをりてみるらん

千五百番歌合に

野宮左大臣

いかはかり春もをしむも花散は人の心とみよしのの山

前大納言為世よませ侍し春日社三十首歌の中に

民部卿實教

誰もみな花はちるさやちるらんなくて山ちにおもひ入ぬる

花第一といふことを

順助法親王

ぬれつゝもおなしそてふる山桜かゝるもたれか花の常に世の中に

法印長舜

ちるをこそうらみしとこそ咲花も匂ひはのこる春の山嵐

平宗宣朝臣

あすさく花の浅ゝきにあらしのちるもみるまゝに捨かたし

藤原隆経朝臣

けふちるを惜ていそく桜花のとけき春の色をみるらん

前大納言為氏

風のまにちらすハおりても山桜いくかの花のさかりとるらん

寛治八年八月高陽院哥合に桜

権中納言通俊

春風ハ吹ともちらふ桜をも花のこゝろと我まなりけり

花しらす

花山院御製

霞たつ山の桜ハいつくにハ人のこゝろみえて春やさくらん

太宰権帥為経

こゝろして見れハ海ふく山桜ちれハよそなる峯の白雲

寛元百首哥奉りし時花

前摂政左大臣

いさしよ空に嵐の吹そ手すハよの梢もみねまてや

落花の心をよませ給ける

今上御製

あくかれとうらむもふるさとちるねと風をはらへ山やまろ

花乃哥の中に

仁和寺二品親王守覚

もとみつそめかけの白雲もそらふいつき嵐山風

正治二年九月十首哥合落花

前中納言定家

わつさつ路のかんえの桜もちりぬまろやの嵐山嵐

小野宮太后宮小まそしてけるみちあり

けふ花はちらもてうしこれはさうりなかるをみれは
よみ侍けり　弁乳母
散ぬれはしほりのをと山桜枝をまつとや風もふくらん
天徳四年内裏哥合小桜
中納言朝忠
あさみとりかねてありける桜をもおしむも猶そあかすけるかな
をしらす　貫之
ちる所はしらしとみましとも三重つもかへのなとを雨かは
よみ人しらす
手折てもなをそうらなく桜をもふつくる風やふきまさん

建保四年後鳥羽院に百首哥奉りける
時　参議雅経
春風はちるへくもみえぬ木のまつかふ山桜かな
花の哥よみ侍りける中に
津守国助
桜をもちるをもたれかをしむ山おろしに吹そ春の夕風
惜落花といふことを
九条太政大臣
ちる花のおもかけなとをかたみにて行も春そかなしき山桜かな
百首哥奉りし時

入道前太政大臣

あれてみる老木にもよちりやまぬに春のかさなれん

雨後落花を　　前関白太政大臣

あめはるゝ跡にも花よりせきてこそ露もたまらすちる桜かな

花光の中に　　中務卿恒明親王

立かへりよゝのみこそ恒つたふるもいもとちしとこそ

後法性寺入道前関白家百首歌合に花下の

月　　俊恵法師

花よりも月をそこよひおもへともあかすいつるちるをこそみん

修理大夫顕季家にて花十首よませ

侍りけるに　　俊頼朝臣

折とくはいそなれさくら桜もちらさとや心まかせに

散しらす　　大納言経信

春風の吹まふ時は桜花ちりまかへことによそのさそみ

前内大臣　通

よみゝゆるもの三ゝけてさりなの人の桜いまやちるらん

山河に花のなかるゝを見て　　従三位氏久

ちるもののあとはいまにも吹しつて風のそまはらの山河のみつ

西園寺の花のさかりにまかりける

常盤井入道前太政大臣

花ゆへのやとのあるしを池にうつしけれなほやこころん

返し　西園寺入道前太政大臣

きみすめはおもひともまさし桜もちよのちとせはちらしなん
花故御代とふるすと

源兼康朝臣

あさゆふにふくあらしも花そなく咲くとこころつくさむ梢を

題不知　源邦長朝臣

吹風のうらみもよせし山桜人とはらはものの名をもおし

平貞時朝臣

なへてみる桜の花はおしまねやはさそふ嵐に花のちるらん

平斉時

咲ぬるも梢のそらにこそねなるあさけの風にふかれて雪

前大僧正實超

さらそなき遠山梢の春風にうつろふ花はて花のちるらん

池上落花といふ事を

藤原泰宗

花ちりのみきりの桜ちりうけてもろの波に春風そふく

嘉元百首奉りし時花

津守國冬

櫻花ちりにし吉野山嵐のあとにかゝる白雲

法印定為

風わたる雲かとみしの山桜花の色とそ雪とふりける

文永二年内裏十五首に落花似雪といふ
ことを

前大納言為氏

雪とのみふりそまされ山桜ちらぬものゝ春風のまゝ

まさりたるのふみにしはしとて入道前太政
大臣に給はせけり

伏見院御製

おもかけにも面影とゝめし高ねの花かとそみる雪

御返し

入道前太政大臣

とてしもみつるかひはありそまても花の庭もせの白雪

正治百首奉りける時

後京極摂政前太政大臣

春ふかきことそこれかのたかねの花は雪とやしらるらん
花しらず

後鳥羽院御製

吉野山ちりぬる雪とみるまでに有明の空にむもそ花かな

前大納言為家家に百首よみ侍りける
に

従二位家隆

みよしのや嶺の嵐吹ぬらし空にしられぬ花の白雪（雲）

嘉暦二年四月内裏歌合に桜

修理大夫貞季

君こそはなを盛りにて山桜みつからかさもとふらん

月花門院へまいらせられける

常盤井入道前太政大臣

山里ハとひくる人の跡絶てありつむ花ハ雪とみえしを

永仁二年三月内裏にて人々に三首よみ侍りけるに山路落花を

藤原為道朝臣

ちるまゝに雪へりける山路とも跡つきぬ花の雪にそ来る

寄風花といふことをよませ給ひける

伏見院御製

うつろふも心つからの花なれハちりそふ嵐といひつうらみん

花の歌の中に

藻璧門院少将

春ことに世ハむかしの春も世とて春さくもとをはなをみるらん

西園寺入道前太政大臣

袖の上にあかぬ色かとてめてけるこれや春風花の雫に

落花閑花不見人といふ事

太上天皇

ゆかえてしつけき宿に咲花のおりつまてみる人そなき

讃岐宰相家の哥合に

よみ人不知

鶯のなきせにもやおしみなん春くれたる声になくや

見ることのさやけかりし時よりもせ給ひける

今上御製

さのみやは春なるやまのかすとらんやよひの雲井の月

百首哥たてまつりし時

前大納言為世

おほくその波をわけきし春のよの月はいつより霞そめけん

二品法親王覚助

かすむよの月はそさらにしのはるゝ哉春の昔は

春月を

平時村朝臣

春のよのかすみにくもりかゝれるは波にとりて月やみえさ

後深草院少将内侍

くもりとはみえぬ梢て久かたの空にかすめる春のよの月

よみ人しらす

法しとは祓てまし春のよの月をとてそぬ霞ありせは

弘長元年百首哥奉りける時同人を

前大納言為氏

みるとおもひも見てしせぬけの末まてにかやおくかすむ春の夜の月

春暁月といふことを

伏見院御製

月影を霞にこめて山のはにほのかにのこるしのゝめの空

延喜御時御屏風に

躬恒

ひとりのみみつゝそ思ふ山吹の花のさかりにあふ人もなし

寛治百首歌奉りける時籬款冬

前大納言為家

山吹の花こそいはぬ色ならめかりそのまかきとふ人もなし

土御門院小宰相

重ねてそ人もとまらぬ雨のふるまゝさく山吹の花そ色よき

同心をよませ給ひける

法皇御製

桜も花はちりて山吹の匂ふまかきのころ春なれ

嘉元百首歌奉りし時款冬

権中納言公雄

くれつる春の形見を折しとてみやいはまの山吹の花

春の歌の中に

権僧正覚寛

行春をおしとはいはぬ色なれや心にうつる山ふきの花

後鳥羽院御製

山吹の花色衣にしもそふかさねてやかてそおもひなりけん

弘安百首歌奉りける時

前大納言為氏

ゆく春はさてもとゝめし山吹の花にかけさへをしまるゝと

岸姫松といふことをよませ給ひける

法皇御製

松かえはみとりにふかくかゝり来て紫にほふ池のふち波

題しらす

右近大将房實

いく春も花のさかりを松かえに久しくかゝれ岸の藤浪

三条入道内大臣

二葉より契りおきてや藤波のかゝれる松はよろつ代を知ん

隆信朝臣

おさまれる世は吹ともみえぬ風のおとの松にかゝれる藤浪

うみ清しなからや岸によふちの花のさかりける

とよめる

伊勢

我宿のかけとそたのむ藤なみも立よりくとも波にをらるな

天徳四年内裏歌合に藤

中納言朝忠

紫に匂ふ藤浪うちはへて松にそちよの色もかゝれる

屏風乃絵よ松に花のちりかゝるところ

平兼盛

ちる花はそこなるかやとれ松にこゝろく咲る藤波

題しらす

大中臣能宣朝臣

桜もちりぬるにをすつは大かたの春ををしとはいはしとはま連

藤原家経

行春のひかすもとゝりさて紐りまくあかさし山桜かな

寛治二年百首哥に惜花

山階入道左大臣

いかにしてしはしとゝめむ桜もちりなはなけの春のひかすを

題しらす

右大臣

一とせにかさなれとせあてとめやもと春その過行よ

百首哥よみてたてまつりしとき

関白内大臣

行春をなくとゝめのりとれ立とゝまる庭乃桜風ちりのまひよ

暮春乃こゝろを

前権僧正雲雅

藤の花をりそひて行水のえてぬ波に春そ暮ぬる

題しらす

権大納言兼季

吹おろす嵐の山に春くれてゐせきにむすふ花の白波

暮春乃心を

西園寺入道前太政大臣

暮る霞のけふ山のねにおくるとも春乃雲にかゝる

人々に五十首哥めしけるついてに

後鳥羽院御製

いとつらく春くれはてにかりもものこほれやるをしむ

かへるもせしまに

續千載和歌集巻第三

夏哥

嘉元百首哥たてまつりける時首夏

衣笠内大臣

春とのをしみしかひはなく夜もけふにかはる花のかなしけれ

四月一日よみ侍りける

和泉式部

咲そはもみのけそなしてこそ夏ふかそ見る春はをしけれ

卯月のころなをさくらを人のもとへつかはすとて

赤染衛門

まちかねもふしやとなくさめて声をねよとこそいひさりけり

永久四年四月鳥羽殿歌合に卯花を
左京大夫顕輔

わさひやまねりとの里の卯花もとはすせるみのとこひけるかな

千五百番歌合に
二条院讃岐

神まつる卯月の花も咲にけり山ほとゝきすゆふかけてなけ

弘安百首哥奉りける時
式乾門院御匣

住の江の松はひさしき時鳥ときはなかなの一声もかれ

題しらす　よみ人不知

まつねをは我こそ花を時鳥ことしふかまつ人は有とを

亭子院歌合に
在原元方

あやまりていまは初音は時鳥よそにて人は我宿になけ

題しらす　前大納言公任

かのこをねかさりは郭公まつ人のことそ猶まさりける

宝治百首哥奉りける時郭公
後深草院少将内侍

時鳥なつねまちえて時ならぬ鳥の声をあかしつるかれ

ねかしくを　関白家歌おほね

あけやらぬ夜のまぎれと時鳥まつにつくるは鶏の声ぞなき
あかぬ百夜をなきてまつりける郭公
前参議雅孝

待人のそはとゝむよるの時鳥夢路にさへてきく一声ぞする
百夜も今をそへまつりし時
右大臣

我宿にぬる人まちて時鳥のこる一声の時まちかねん
あかぬ百夜をまつりし郭公
前関白太政大臣

時鳥人をまつらずば我身ひとつと恨ぎてまし
夏乃夜中半り
前大納言師重

人とはぬやとゝころ時鳥なにとかたらふためにあるらん
皇后宮

君をやまふの山ほとゝぎす心のかぎりなくやと
慈道法親王

時鳥なにそなるまつに我宿の人のうらみさふと
聞しらず
今出河院近衆

わたつみの河乃瀬わたりにかゝれてよろぬ時鳥

伏見院御製

なのめにて時とふ宿に時鳥ゆふへはまさてなと過らん

法橋能昭

初音をもまてりやさしと時鳥まつ夕くれの命をいとふや

三条入道左大臣

まつ程の心をしれよ郭公いつそとひとのかたらふにさへ

平時元

待あかさせなからひとこゑさそ時鳥しとゝや初ねならなん

藤原泰宗

時鳥さ月まつされ声のひねもおほつかなさ村雨の空

前中納言季雄

我にこそつれなからめとても時鳥なくて月にはなきわたらなむ

権大納言兼季

左前の月はかくれし郭公つれなさけにはなくひとこゑ
あかぬ百こゑまちてきつりし時鳥

前大納言俊定

つれなさといつとたのみて時鳥なくを五月の月に待らん

おなし心を

伏見院御製

待なさを月にそこそ時鳥またいふにもつれなさ五月の空
見しらす

藤原基俊

かゝ夜ふけての山の時鳥うらめしくきゝけされなき聲

安法々師

さてもなほひとふしきゝし時鳥まてとねよりもおとろかしけれ

伊勢

時鳥よふかきこゑは月まつとおきていをねぬ人そきゝける

暁聞郭公といふ心を

寂蓮法師

郭公在明の月の入かたに山のはを出るよはの一こゑ

人のあまたさ思ひて郭公こそまちあかすとよませ給けるに

源道済

時鳥鳴こゑきけは山里にてよりことに人そまたるゝ

夜前の中に

法眼弘済

山ふかく尋て里は時鳥よけつる雲の絶まなるかも

権中納言為家

待れつる月にそたのめ時鳥かたらふこゑは誰とまちし

貞治百首歌めしけるついでに郭公

後光厳院御製

我もまたことしきこえて時鳥鳴つる往の人ならしと

前大納言為世よませ給し春日社歌

花前中川

藤原為定朝臣

なくさめにみそやまところはるまてつかふまき心つくしを
猶しらす　　平宣時朝臣

はるゝと思ひしよりもうつりえてうつるわこゝろあれ
法印長舜

さくら花散たはなつくはるかなりゆきあひたる花ちるまつ
津守国助女

いつまても見まほし道の摘といはまほしき雲にたなひく春の花
二品法親王覚助

わか身をはさそふれとも春の雅ひとつてゝひとはいさ

百首奉めしけるついてに
法皇御製

なにとなくこゝろかのへし春の日はうらゝとやすらへ道
法印定為

つまさそふかすみのそてやはるの雲ふかいいそせのわたるなん
永嘉門院にて祐子内親王家歌合に
弁内侍

ありしよりまたつらくなる春の雲そへるよりものこるら
猶しらす　　西行法師

まちとはぬ宿はまてしと思ひしにさきにけり梅のさかりぬ

永保元年内裏にて暮天郭公を

京極入道前関白太政大臣

今こそはまちそなれつる時鳥くれゆく空をさそふ一声

夜郭公といふ事を

太宰大弐高遠

何となくまださよふかきやみのまに時鳥なくを聞くもうれしき

嘉暦二年内裏後番歌合に郭公を

よみ侍ける

権中納言通俊

あけぬるか夜をかさねてん時鳥ふたこゑをなきてきくも

ねたしこころを

禎子内親王家摂津

夏とてもおとろかれぬる時鳥まてとこそきけ夜半の一声

後徳大寺左大臣のもとより山ちかきすまゐに

郭公も人よりはさきにきゝつやといひつかはし

て侍りければ

上西門院兵衛

わきてなとひとりはさこそ時鳥まつにしもあらぬ花のをちかたよ

夏乃哥の中に

前参議雅有

とをくやまのなくちのきこえてもふりそめし時鳥

猶さめぬ郭公なきて

前関白左大臣　近衛

時ゝふ鳴そそさみる時鳥つまもかれ我手と待ほかん

暁郭公を　前大僧正良信

暁のねやまよふ一声をあきさそへくゆ時鳥なれ

題しらす　伏見院新宰相

時鳥わすれてつゝ花よりも仙覚の跡半きこそ弥出

永福門院

郭公ゝまたたそかれの雲に鳴まそゆけあけぬなり

弘長二年亀山院に十首歌奉りける時

野郭公　山階入道左大臣

時鳥一声ゆくへはむらさめの空をながめやりみよそ色やあらん

正治百首歌奉りける時　前中納言定家

郭公三声やすらへすぎやふしみの里むかしのこゑ

家歌合に羇旅郭公といふことを　光明峯寺入道前摂政左大臣

やすらはで三声はいさらむ時鳥よものまくらやかりね成とも

題しらす　源邦長朝臣

なかなかにおもふこゝろのさはりとも山ほとゝぎすなかましものを

宝治百首歌奉りける時　早苗

祝部成茂

五月きぬみしろにまつる神のまへ早苗とるらん

おなし心を　堀川右大臣

ほとときすなくなるこゑをきくよりや山田のはらに早苗とるらん

千五百番歌合に　野宮左大臣

足引の山下水をひきためてその田井に早苗とるなり

法眼行済よみ侍りし小野社の十首歌に

法印定為

見るも世は鳥羽山小田の松かけにみとりをそへてとる早苗哉

二品法親王家五十首歌に早苗

津守国道

下草は人ねまちけり大あらきの杜の下田に早苗とるなり

題しらす　前中納言経継

ゆふくれと花たちはなの匂ふ宿早苗はとりそ宿の前に

百首歌よみ侍りける中に

皇太后宮大夫俊成

あてよいくたに苗をとるへとてむらちのせにちるらん

盧橘暮薫といふことを

基俊

袖ふれし昔の人そしのはるゝたちはなのかをりゆへ

題しらす　　平雅貞

風ふけは花の下枝に袖のへて匂ふなるらむ

百首歌たてまつりし時　　権大納言宣房

たちはなのかけふむみちをすきやらて三こゑまつまて時鳥

五十首歌よませ給ひけるに　　後鳥羽院御製

時鳥心してなけたちはなの花ちる里のゆふくれのそら

嘉元百首歌たてまつりし時郭公　　贈従二位為子

時鳥あやめのねをもかつかにさ月をかけてたれとまつらん

久安百首歌たてまつりける時　　皇太后宮大夫俊成

さ月をそまちけるものとなれぬるを時鳥なくをまてとそ聞

嘉元百首歌奉りし時郭公　　昭慶門院一条

時鳥なくやさ月のおほそらにして村雲まよふゆふやみの空

五月雨をよめる　　祝部成貫

五月雨はふりぬるひをそともわかぬ人の袖のしほれ袖の浦波　　津守国助

みるやいかに山の岩ねもかくろへてつくへき五月雨乃比

河五月雨といふことを

前大納言為世

山河乃岩にせかれしたきつせもこゆる波のさわく比

百首歌たてまつりし時

山乃井もまたみくさにむすほれてけさみえぬ五月雨の比

池五月雨を　　前律師實性

池水乃みくさもみえす波ならはひとつ波こす五月雨の比

題しらす　　大江宗秀

日数ふる波やこすらん五月雨は雲の色にもみえぬふる川の橋

高階宗成朝臣

五月雨にあれてそいつる山川乃みなかみいかにまさるらむ

百首歌奉りし時

前関白太政大臣

いさみ川みなさかりて五月雨はいつもそれともみえす

題しらす　　前大納言為家

五月雨はゆくへもしらぬさゝ浪のいはこす川の瀬とそなりぬる

家百首歌に小山五月雨

光明峯寺入道前摂政左大臣

立田川みかさの波も立そひぬ三室乃山のさみたれの比

たなしへと

前大僧正道昭

さまたれのふりとのはれまとそひてすみなれぬらん五月雨の雲

百首歌よみてまつりし時

権中納言為家

あまのかはまさのみかさもましぬらしむら雲の波にかゝる五月雨の空

名所百首歌よみてたてまつりける時

前中納言定家

五月雨ハあまのかく山空とちて雲そかゝれるみねのまさかき

千五百番歌合に

皇太后宮大夫俊成女

見しくもと跡あるぬ秋の夜の月影とゝめて沢に五月雨の空

名所夏月といふ事を

大江貞重

明やすき空にそいそくなかはまた山のはなれて山ふかみ月

弘長三年内裏百首歌よみてたてまつりける時夏暁月

前大納言為氏

夏草の暁おきの露にまたうつるはあかて山本の月

宝治百首歌めしけるついてに夏月をよませ給ひける

後嵯峨院御製

夏なからけそすゝしき衣手の月のいろに秋やとるらん

鵜川を　中原師員朝臣

夏の夜の明かたちかくもいやをはしとうかひのかゝりけちそむる也

前内大臣通

うかひ舟てらすかゝり火さしみえてみな世にあかつきちかき夏の影

入道前太政大臣

大ゐ河くたすうかひは暁の月はさすまてかゝりのかけ

承元三十首歌たてまつりし時

前大納言為世

うかひ舟瀬〻にほしの白波にうつりてくたるかゝり篝の影しらす

順徳院御製

飼かくされぬる(つゆ)のみかゝる夏草の明くれは夜かけて出しかりて

為恒

夏草はひとにしらぬくさゆけとかれし人のとはぬ宿かな

建保五年四月庚申に夏の歌小夏暁

参議雅経

夏草の露わけ衣この比は暁おきさへ袖そすゝしき

百首歌めされしついてに

法皇御製

夏草のしけみえこしにかくろ露も五月のあまましかゝとそめん

従二位宣子

しげりあふ夏野の草にかくれてはしげりゆく人もそれとしも見えね

夏草といふことをよませ給ひける

院御製

今は身にしげりゆく宿はとも枯みちもつる庭の夏草

亀山院御製

ふみ分てとふ人さへもなき我宿はしげるる庭の夏草

山本入道前太政大臣女

わきみどりの色や草葉ともの中にやよふくしげりそふ

前大納言為世

人くさめてよ露を絶し

去日祓ふ草の中に

藤原行房朝臣

夏草のしげみにまじるをざさ原下葉や秋の風を待

蛍をよませ給ひける

院御製

風そよくをちまに蛍かげのみえて波のうへに羽ぞ涼しき

あかえ百てさまりし時れなし心を

前大納言俊定

夜ふかくしげりなるにはわがまにもはらひて行は蛍なり

贈従三位為子

大井川ほのゆるやかにまどふに行ぬ蛍のかげ加ん

弘長内裏百首哥たてまつりける時沼螢

前大納言為氏

かくそかくとはさらぬ沼の草葉にかくるゝハ螢なりけり

百首哥たてまつりし時

津守国冬

螢とふおかはの水のすゝしさをよるはなかるゝ心をそしる

文永八年七月白河殿にて人々題をさくりて百首哥よみ侍ける時　蚊遣火

前大納言為家

ややまかけの下庵ちかきぬかやりひそかくれぬ賤か宿もしられけれ

夏哥の中に

西園寺大臣

わかともし小ゆるむ人もなき独のみおもひあかさこそ夜も

寛和二年内裏哥合に

藤原惟成

心してとしもたえてや見ましこれ花のさかりをとしもみるかな

弘長百首哥たてまつりける時夕立

衣笠内大臣

この里もふりぬとみゆる夕立のくもりかゝるにはれぬなりけるかな

従二位行家

なるかみのおともしくれもすきやらてひかしの山の夕立の空

文永二年七月白河殿にて人々題をさくりて七百首歌たてまつりける時瀧夕立といふことを

前大納言為氏

むさし野やかせもふきあへす志ら風のみちとにゆく夕立の雲

寳治百首歌めしけるついてに夕立

後嵯峨院御製

かきくもりそらとも見えす過る夕立の風にさきゆく雲に合てハ

弘安百首歌たてまつりけるは

前參議能清

一村ハやかてはれゆく夕立のなを雲かゝる空そ涼しき

百首歌たてまつりし時

入道前太政大臣

夕立ハ過ぬるみねの村雲に志はしおくるゝひくらしの声

ま

夕立を

祝部成久

猶あまそゝくにはかりきて日かけにかゝる夕立の雲

題しらす

中臣祐賢

秋きぬといひやりそ夜衣すその荻の下かけ

弘長百首歌たてまつりける時

前大納言為氏

涼しさハまちよりさきにしられけり松風ちかき宿のゆふくれ

題しらす

宇治入道前関白太政大臣

夕されハしのゝをはらを吹風のまたきに秋の声きこゆ也

建保四年百首歌たてまつりける時

前中納言定家

夏衣かとりのうらのうたゝねに波のよる〳〵かよふあきかせ

久安百首歌奉りける時

上西門院兵衛

夏衣きぬハかりに涼しさはむすふいつミにあきやかよらん

山階入道左大臣家十首歌に納涼

源兼氏朝臣

せきいるゝ庭のしみつハそれなからあきを心にまかせやはせぬ

夏哥中に

為道朝臣

夕立の雲の下風ふきすきて露もたまらぬせミのこゑ

寂蓮法師

しくれにはあまきもなけれハ夕山乃梢にはく蝉のもろ声

百首歌たてまつりし時

大僧正道順

なきちらす杜の梢に蝉の声遠て山ち涼しき松の下かけ

関白内大臣

しけりあふ木すゑの梢かけそへてせミのおりはへなく日くらし

前関白太政大臣押小路

みそきする末の河波かけてあきぬよりふく秋風

昭訓門院春日

わきてまた涼しかりけるしやみそきよふけの川せ

嘉元百首歌奉りける時六月祓

冷泉太政大臣

底清きらせのみなれあさの葉にしてゆふかけて見んそれをそまつ

百首よみ侍りける中に

皇太后宮大夫俊成

水上は秋や立らんみそき川まてにかよふ風の涼しさ

千五百番哥合に

後鳥羽院御製

みそき川瀬々の玉もの見えかくれてしてまね秋や

こよひたつらん

續千載和歌集巻第四

秋歌上

百首歌たてまつりし時たつあきの心を

入道前太政大臣

いつしかと袖にしらるゝ露の色に秋は涼しく吹かはる風

中務卿宗尊親王

けさはいかに露そひまさるおしなへてやれのひとよに秋やさき

五百番歌合に

惟明親王

いつよりかおきそふ下葉にかよひそてけさはかはれる秋風

題しらす

光明峯寺入道前摂政太政大臣

いつのまに秋風たちておきつ河乃浜松に吹そはしむらん

百首歌奉りし時

前中納言為相

天の川みなけ草はいくかまて秋ちかましきそよ一葉そらん

中納言家持

七夕のふなのりすらしまそかゝみ清き月夜に雲たちわたる

山辺赤人

もとかりし七夕つめとことよひかふ天の川原によるそわたる

亭子院歌合のうた

よみ人しらす

天の川こりて渡そ七夕はふるきさんをこひわたるらん

亀山院位におはしましける時七月七日人々
に七首歌めされけるによみてまいりける

前大納言為家

あまの川遠き渡しをそこと七夕乃あふ瀬雲かくれかけはしならん

家の五百番歌合に究坊黄

後京極摂政前太政大臣

星合乃空の光となる月のは雲ゐの庭にてらすなりけり

七夕の心を

前大納言有房

七夕乃露の契りの玉かつら掛けて結ひはかなしき哉

八日前栽乃露をさしあつとおりて法性寺
入道摂政乃もとにつかはすとて

選子内親王

露をきてそなたもおなしとおもひやるあまのかはらの暁の空

弘安百首歌奉りける時

入道前太政大臣

あまの川せ乃波の立かへりまた袖ぬらす天の羽衣
乾しらす

源兼氏朝臣

七夕の雲のころもを吹風に袖のまよひはあかちもなし

同月七夕といふことを

前中納言定房

契りありてむすびしゆつきの数そへてこゝろにも後世あされ

大神宮まてそへて千とせ経けるが千世そ前 川舟

中に

後鳥羽院御製

朝露乃わかれやけふ山嵐にこそはれて野の秋そわびしき

題しらず

忘らるゝ身は昔の秋までもこの世にまよふ萩乃上風

正治百首歌たてまつりける時

前中納言定家

いそかれてともの萩原やしばしかすむ世の旅衣露

千五百番歌合に　二条院讃岐

さらぬだに秋の哀をそへてけりおきゐる宿の萩の上露

述懐百首歌よみ侍けるに萩

皇太后宮大夫俊成

我袖はおきさる露になかまやそよめくかたに露落ん

寛和元年内裏歌合に露

花山院御製

萩乃葉にをけるしら露玉とてや袖にはいめとなかるらむ　なり

嘉元百首歌たてまつりし時萩

権中納言公雄

わきて猶ゆふへは露のおきまさる葉にも波こそよれ萩吹風

題しらす　　法眼慶融

吹むすふ萩の葉すゑにちる露を袖まてはこふ野の夕かせ

弘安百首哥奉りける時

入道前太政大臣

夕されは野への萩はらに吹風の色こそみえね露そこほるゝ

弘安八年八月十五夜百首哥に秋風篇

前大納言為氏

村雨の野分の露の玉ちりてしほれし袖をふきさます萩の夕かせ

題しらす

伏見院御製

村雨に桐の葉おつる庭の面のゆふへそ秋のふかかりける

後二条院御製

宿となる夕暮とふ人なれは我よりさきに物思ふを

田中秋夕といふ事を

前中納言定資

ほのかなるさとのそともの田の面には稲葉の夕をいそくらん

秋哥の中に

二品法親王覚助

今更になかめしもとはわきてなほいかにせしのふのこそなかめの暮

大納言経長女

物思ふ人のいつまてもやすからぬ身のうへの秋のゆふくれ

平久時

いかにせん招く袖の涙にはかゝる露そふ秋の夕くれ

嘉元百首歌奉りし時露

太政大臣

なかめつゝ涙かともおもふ我袖よ露やはとかぬ秋の夕暮

建暦二年内裏詩歌合に山郷秋夕

後久我太政大臣

みなせ山ゆふかけ草の下露やあさゆくしかのなみたなるらん

題しらす

遊義門院

あさふかき袖の涙や草葉まてこのゆふくれの露となるらん

嘉元百首歌奉りける時

前中納言定家

結ひ置し秋のさかりはいかならんとこは草葉に露かをれて

麗景殿乃をとこたちむすひつけを給けり

九条右大臣

白露乃をくとはいつゝ花薄ほに出て世にはあらはれにける

題しらす

津守国道

花落乃涙とも白露の袖によそふる秋の夕暮

なくて秋蘭とふくとも

前僧正道性

夜すから何をかたみすてゝ野となる庭は萩のうへかせ

天慶八年内屏風に　源公忠朝臣

秋の野に色こく咲るもみれしらて人行きいやとしまね

夕くれにちりはなさそはさむしとや

むらさきのうすやうはそてまきれ花よ

ほしてきる人さへ前のあのりをせさせて女流

まさしをらんすとてその清みかはさゝを

ありけり　よみ人しらす　次

志あやうれ花の匂ひをすゝ出れともいやはさまてふき

えし　選子内親王

色ゝの花ハちりはいかにふとも野原の風はなをのとけ

あいしらす　前左兵衛督教定

我宿の庭のおもに萩咲よりおもゝなくそ置ぬらむそ

邦良親王

たか為とのきた萩咲ちし宮人の袖つきさゝやも露そうふ

従三位氏久

夕ふくる月にそみゆる風ふけてはもとの萩の錦哉

建永元年和歌所にて水郷萩花

従二位家隆

我袖とはけさもかりねに露もひとつハ露ともゑみのかたの萩の白露

題しらす　よみ人しらす

むかしの人待つ宿にも秋萩は色もまさりてしきまされ

万秋門院

鈴むしのなくよみもまれに志つかなるゆふけのまゝに萩原露そふ

野萩を

藤原為定朝臣

袖にそこらくれなゐそめけるよすかの紫は萩の花もさき

百夜めされしつゝに

法皇御製

たか庭の壁のへの秋風吹くらむ夜は袖にこそ萩の花ちり

花に百夜をあかしけるは

僧正行意

なにゆゑのもみちのあさき萩咲にけり色むけぬへの秋の露そも

色しらす

大納言旅人

ゆくすゑのこゝろすむ軒の萩の葉のをりにこそしたゆきそなき

後徳大寺左大臣

やすらひきみをまかんとやさきつる萩か花ちる桜のゆふくれ

壬生忠岑

秋萩の下にかくれてなく鹿の声の波やはなのしたにそしらん

永兼五年親王家歌合に

相摸

露結ふ萩の下葉やうつろふらん秋の野原にしか鳴也

志かをよめる　小弁

はかなしや妻恋かねて恋しかの萩原さわきうら

百首歌たてまつりし時

前関白左大臣　押小路

嵐のゆく松風さえ身てや萩咲野辺にしかの鳴らん

忠房親王

をしかの萩の下にさねし衣こふる夜しも妻やこふらん

秋哥中に

従三位為継

秋草の色もうつろひしかれはてゝ小野の末に鹿そ鳴なる

名所百首歌たてまつりける時

正三位知家

うつの山木葉色は濃く嵐にまかひてなきさそふしか鳴

ときしらす

法印定円

夕されはこゑのつまよりも妹背とてきぬるや鹿の鳴らん

嘉元百首歌たてまつりし時　鹿

前中納言経継

我こともねよるよりて住さの夕暮と住そ妻こふにや鹿の鳴らん

法印定為

高砂の松の風鹿のつまよふるまてを遠に妻や恋らん

題しらす　　行念法師

秋をしるしれねのまつのきりの松風おしむもふる月を

中務卿宗尊親王

なかめやる山のはの月影風ふかぬ日はおもひともしれぬよにを

月下簾を

後堀河院民部卿典侍

さしのほる月のひかりもいとゝなほ行くまゝに山の端出る月影

前大納言経房

月影はいつもとて空にありとしれねはへよするの秋の

対月閑簾といふことを

平貞時朝臣

山のはをみえてかたふくまての月をよるの月をそみる

題しらす

在原宗継　縄

住そなれてくらすなかめの山や出る月をそ待月に簾をかゝけ

藤原基任

月これは秋のさかひもなくさむるとこのよの小簾はかゝらん

正安三年八月十五夜内裏十首歌に寄

月前簾　　左大臣

よそにさへ我かへるさそさそはれし月をまつとそ玉簾のそ

嘉元百首歌奉りし時閑簾

入道前太政大臣

花薄ほのかにさけハ秋霧の立はなれても思ほゆるかな

前大納言為世

を山田のいほりちかくも秋霧にへたてゝ鹿そ鳴なる

百首哥たてまつりし時

二品法親王覚助

秋霧にたちかくれつゝ鳴鹿ハ人めをさそやはなれさるらん

田家鹿を

権僧正桓守

山田もるかりほのおりくやましたに鹿のねさそふらん

後光院入道前関白太政大臣

よさむなる里のあたりの松風によハりもはてゝ鹿そ鳴なる

山鹿といふ事をよませ給ける

法皇御製

ゆふくれハおきさる衣とねよそてみねの嵐に鹿そ鳴なる

嘉元百首哥よませ侍に鹿

万秋門院

なく鹿の声をまつにたかさこのをのへのあさやよさむなるらん

題しらす

平宗泰

夢さめの衣ハ袖をしめしたる鹿をまつりか鹿やなくらん

前中納言季雄

まそはにも波とそつくしくしはし鹿の音なとやそふらん

藻璧門院少将

かへるさはいなはのせきにまさるてよさむの衣や春をへぬらん

弘安百首哥めしけるついてに

亀山院御製

ちりはてぬ尾花か末の小萩原下葉色とるみえわたるよ

初雁を

従二位行家

萩のうへの露はいつより置つらん今そ雲井に雁のなくなる

蓮生法師

初かりそ萩の下葉の色はへは我袖よりやうつりそめけん

平宗宣朝臣

山風のさむきあさけにみねこえてくるともしらぬ秋のかりかね

屏風哥に

躬恒

あきことにくれとかへれはかりかねのひのもとはかくそありける

聞しらす

人麿

ゆくさきは雲のかけみちもなき秋をいそきてかりのわたるなるらん

千五百番哥合に

後鳥羽院御製

秋やこし雲ゐのそらの夕暮にあまつそらなる初雁の声

百首哥たてまつりし時

権中納言為家

嵐ふくよさむ河へのよさむやさきたつかりの山もとの里

霧中鹿を　　慈光院入道前関白太政大臣

秋山の梢もとをくもる霧にこめて色ゆく初かりの声

霧といふ事を　　藤原宗秀

霧わけてむら風まの嵐にはれても猶川は嵐の経けり

大江頼重

夕暮はすその霧やかれはまかりもの袖よ露をおきて
よるへ人恋すす

今浦に聟京の霧の下露に波をすてもぬらす袖かな（袖そぬれたり）

百首哥奉りし時　　法印定為

月の色さへすむ浦の秋もみえに霧をこめてゆく梢かり

弘安百首哥奉りける時　　前大納言長雅

立こめて日かけつゝむ霧風まつ程はよそのかねかな
みえしらす　　永福門院

ちらむまて峰もとをてる山への紅葉さえぬる峰の霧
とふしらと

文永二年八月十五夜歌合に未出月　　権中納言公雄

置人の心むつしくねた山のあけてゆく月そ浦そろて

光俊朝臣よませ侍りける百首哥に

藤原隆祐朝臣

めくれ行月まつとても掛そふ雲にかゝるの杉の山のはに
今宵月まつらんとよみ侍けるそのちかひにさして

藤原實方朝臣

しらとしも小はつせの月をまつほとて待しもてをふかぬはかあかしらす

前大納言為家

夕嵐ふくにゆく雲と出やらてまつ夜をたよりさよふけん月

入道前太政大臣

まちわつる山の出くる松のいはねにかゝる月そさやけき

伏見院位におはしましける時月十五首歌

めくれし中なり

前大納言為世

今宵まち空に光はかはらしをまてと見る秋の夜の月

民部卿實教

山のはをいつれもやそとみえてはまたぬ夜に出る月か

前関白太政大臣家讃岐

出やらぬ程はおなしき山のはの月に雲なかくさそそ

信實朝臣

今宵秋の嵐はなかにとりてふかくまてる雲なき山のはの月

堀河右大臣

夕されの空もさやかにすみのほる月の都も旅とこそみれ

性助法親王家五十首哥に

法眼源兼

絶出る峯の月はさやかにふけゆくも雲に嵐そ吹
あいしらす

紀淑氏朝臣

まれにくる人のかよひ路の川よさをみそてひとりと出る旅の月

津守国夏

あま川せ雲吹よる乙女子か袖ふる山の秋の月かけ

平貞文

あはれてふ心ふせやの板まより月そもりきて袖ぬらしける

二条太皇太后宮摂津

みすゝ山こゑの嵐に雲きれて照月影をいくよこそみん

洞院摂政家百首哥に月

信実朝臣

雲はみなはれゆく浦の松風にいつよりもまたすめる月かけ

嘉元百首哥奉りし時月

津守国冬

まそかゝみくもりなくて雲払ふ空にこそひとつの月は秋の寝覚

百首哥よみ侍けるに

皇太后宮大夫俊成

月をみてくも霊にかくれをこふすまともそかつふきて川のせき

閑月を　　権中納言為家

秋の夜は関のとさしもゆるさるむ秋さへ侍るもる月のかけは
中なきさにぬれてめち待て西園寺よりなかし
侍しけるに法師寺まうて侍りけるに八月十五夜
の月おもしろかりけれは中宮のかたへまいりて
きこえまつらせ給ひける

永福門院

ことしこそ雲ゐの月も光そへ雛のこゝろやまとおもひ出るに
御返し中宮にかはりてまつりて侍り

せたまひける

今上御製

昔みし秋のこゝろやまたなれ月のかけをもおもひ出るやおもひ
匂ひし華

續千載和歌集巻第五

秋歌下

月不撰處といふ心を

大納言経信

久かたの空にかはらぬ秋の月いつこの里もかくみとそ見ゆらん
影しらす

猶余右大臣

月それは宿もさためぬ旅しるやねさへそ山のをのえの松風

嘉元百首歌たてまつりし時月

入道前太政大臣

清くとなるむかしに見むふしは月より秋の風や吹らん

民部卿實教

因ふる人の為とや秋の月さきそふかけとみせけん

月の哥の中に

前大僧正実兼

いつまてかとりとみるへきおいらくの身の行末は月そしるらん

よみ人しらす

なれてこそかくるおほき光の月なれや六十の旅ねをもみるらん

百首哥めされしついてに

法皇御製

光そふ秋の夜ことはかきりなりむそちあまりていてし山のはの月

前大納言為世玉津嶋社にて歌合し侍

對月　　　　前内大臣

行川のかそへあかしけるひく我身いそちなれし秋のよの月

題しらす　　　　民部卿資宣女

いまは人にしらぬ袖の名をとめて月いくよ秋をとふらん

後久我内大臣

ふりにけるやとは昔にあれはてて月もかはらぬかけそさひしき

建保四年後鳥羽院に百首哥たてまつり
けれは　　　　参議雅経

秋の夜の月はいくよのためしにてあとふる人にかはるらん

百首哥に　　　　殷富門院大輔

世中のうきにつけてもなくさむは月とこゝろやよはのともなり

藤原光俊朝臣よませ侍りける十首哥中
に　　　　藻壁門院但馬

行末といふもせよとてもと浦の月みる程のおもはまさらん

題しらす　　　　民部卿實教

秋といへはやとるとも見れぬ我袖の月は涙もいとゝさえけり

前僧正公朝

いつもの月みる人はいとゝ思へまてそれは涙なりけん

平時遠

人とはぬやとの秋のさひしさは月へてもすみつよの月

津守国道

なかれ行水のいつくを限りて露まてやとる野への月影

百首哥よみてたてまつりし時

少将内侍

おく露のひかりもふかくさ里は更て月のかけむれとみえけれ

月の哥中に

皇太后宮大夫俊成女

曇てもさえぬ月のかけそふよりも庭の露おちる草（さとイ）

皇后宮

秋萩の花の露にやとりて月をさへかへしやさえたん

藤原光俊朝臣

みふく秋風さむき足引の山のはよりいつる月とみるかな

権中納言公雄

露霜のをきゐぬ袖をまさりきくつれ里の秋の月

建長元年九月十三夜鳥羽殿五首哥（十イ）

に水郷月

前大納言為家

さとのなもおほつかなしや長月の月のやとれるせのはひとつは

仁治二年九月十三夜右大臣家十三夜

の哥中に月前雲

源有長朝臣

月影のさえわたるゆく山の端に秋のともなひのそむ浮雲

題しらす　　藻璧門院少将

みむろ山おろしやこゑをなれぬらんかゝるあたりの月そさやけき

殷富門院にて人々百首哥よみ侍ける時
月の哥とてよみ侍ける　　前中納言定家

ときかへし玉ちるせゝの月をみて心そ秋にうつりそめぬる

河月を　　平維貞

天の川かはらも秋もいくかへて月にあらはれ白波

嘉元百首哥奉りける時　　前関白太政大臣

風さむみ雲のかよひもみえはれて月のかけさえしおきつしま山

従二位行家人々にすゝめ侍ける百首

社十首哥合に江上月　　前大納言為氏

住の江の浜松かえの秋風にすみてそ空にくもゆく月影

寛元々年なか月のころ住江にまかりて
暁の月といふことをよみ侍ける　　西園寺入道前太政大臣

住吉の松も我身をあはれとやおもひしるらん秋の夜の月

建治二年九月十三夜五首哥に江月

前右兵衛督為教

くもりなきかけをうつす菅見まよ入日の秋の夜の月

秋歌の中に

寂恵法師

おひぬれは昔にかはりともなきをいかにとしのふ月や見えん

平泰時朝臣

かゝらぬ雲ち分ゆく空へは心のかゝらぬ月やみゆらん

百首歌よみてたてまつりし時

権中納言為藤

すむ月のかけをはそへて入日くれまけぬ秋風そふく

江月といふことを

後二条院御製

かは出のわきさなかにせうらそよ入日よさむよすめる月影

百首歌の中に水月

中務卿宗尊親王

ゆきをゆけは松風さむしおきつなみのこゑのとまりは秋の夜の月

道助法親王家の五十首歌に船中月

前中納言定家

しつさよきこあきれしちとこく舟はいつゝみるる月とみん

百首歌よみてたてまつりし時

法印定為

百首在松歌但ふ㐂

よと河のさしわたるとも白妙よ月かりてみる秋のよの風

左大臣家歌合に月前眺望

丹波忠守朝臣

あしかきのまちかきのきの軒はより月かゝるともみえぬ露かな

題しらす

権大納言冬教

伊勢の海やしほせちかきの雲まより月やすむらん秋の浦浪

山階入道左大臣家十首歌に浦月

津守国助

なみかせのまかきのうらや旅ねしてあかしかたちかき月やすむらん

故郷月といふことを

故郷とこふかりそなれにし昔にかはる月のかけかは

観意法師

住吉社によみてたてまつりける十首歌中に

海辺之月

前大納言為氏

なにはかたうらまちかき月影を旅ねのそてそぬれにける哉

家五十首歌よみ侍けるに山家月

入道二品親王尊助

いふ人もなしふきさそふやまかせにこゝろをわくる秋のよの月

題しらす

兼鎮法親王

秋ふかきとこよの山のせきもりは過てそ月のかけさむきよはの秋

前大納言為世家よませ侍りし歌に旅宿月と
よみ侍りける
法印長舜
都にはわかれなれにし月のかけみしよ旅ねの月はなれ
あかぬ百とせかさねてそきりし明月
法印定為
たちすさむかりやとりや旅の風ふけゆくかせむ月影
今上位よ法の世になりしてのち後捨侍よ
くもまて二のよにはかりそよみ侍ける
慈道法親王
人よりもまつそてらしのことの雲かふきあつよろの月影

禁中月といふことを
左京権大夫有忠
今はややちよまりてに見てし月をよそにみしの雲の上の月
二品法親王家五十首歌に竹間月
正三位為実
竹の葉のすゑ人はとひもこそしれ雲井の月を独そみる
月の前中に
式部卿久明親王
むさしのやいくさきみゆとけまは空にふくき旅の月
前大僧正仁澄
秋のよの月はいつともわかねともやまにはむかしけそさやけさ

徳大寺右大臣

はなやもと山のせさよふけて月はさもしろかねのみね

津守国助

ふる世にかはる月をと待出て秋はなほよにけふあかつきの空

永仁二年八月十五夜十首歌講せられし

時山月といふことを

為道朝臣

なかめけるよの山のはもきたし山ふかみにさしてすめる月かな

大蔵卿隆博

めくらぬ秋のひかりは雲のうへにもふかき雲もる月そうつりて

大炊御門太政大臣女

かねのおとにねさめてみれは暁のまとにそ月はかたふきにける

百首歌奉りし時

前大納言俊光

なかき秋もしもやふかきねの枕の上に月そうつりて

前大納言為世

わしかゝるさふくて月影も雲ゐる波そよせける

海上月を

素暹法師

山のはもみえぬかりそめの浪のうへも月のいつるとみん

恵慶法師

月のいる山おもふこの里人もこよひはかりハ月をやあかさまし

題しらす　藤原実方朝臣

雲のゐるみねにたなひくさくらのあかいつも月ハのほりけるまゝ

後鳥羽院御製

袖の上にあれてもあらし松山の松のこのまにけれ有明の月

為道朝臣

いそせんなるとはかりしの旅みちも月かけみちハおもかけやさと

藤原景綱

おもすみそはのこの海のうら月ハ月をもつきそめけり

くさむらのむしハせいふしと

源順

草むらのそこまて月のてらせはやなく虫の音もよるかなるらん

建治三年九月十三夜五首歌よ野虫

大蔵卿隆博

衣ともいつまてとなれて旅の枕におなしく虫の思をそさす

題しらす　前摂政左大臣

このゐをたのむ人をなき宿にそれともなく松虫そなく

百そも命しのそまりしきれ

昭訓門院春日

始まそてつきをみえぬ松虫のなくなりまさねよなくらん

前大納言為家家百首歌に

従二位家隆

草のいほまつよとの秋風に人をやたのむまつ虫の声

夕虫なとよみ侍ける

神祇伯顕仲

夕されはよりきりさらねやの草枕の下に声そきこゆる

弘長百首歌たてまつりける時虫

前大納言為家

草むらのこゑをいかにともたのみよるそてなれける千すち

暁虫といふことを　今上御製

露ふかきよさむの野の草葉の花ならしみそなく

きりきりす

民部卿實教

人とやはさまよふ人草かけのなかき夜すから露やおきむに

春宮大夫公實

いとゝ猶むしやうしむかわさらまかなそふ声の秋霧を立て

前大納言為世よませ侍し二首歌に蟋蟀

藤原基任

霜結ふあさちかうれの草かれにたえともなくねをやなくらん

きりきりす

よみ人不知

色かはるあさちか末葉露ちりて虫のねさむき秋風そ吹

弘安百首哥よミてたてまつりける時

後九条内大臣

あさちふの霜よの虫とも忘るゝ宿もさそ月はさひしき

旅て虫を

太御門内大臣

虫乃ねハかれぬ野のしけみそとそすてけるあさちふの宿

百首哥たてまつりし時

左大臣

下葉ちるをのゝ萩原かせにとこさむけなるやよそに鳴らん

寛治百首哥よミてたてまつりし(けるイ)に秋田

皇太后宮大夫俊成女

小山田のいほりもる夜の秋風にやとる露さへをきあかしけり

田家擣衣を

為道朝臣

よさむなるかりほのいねそに山田もりとも衣うつ也

家に七首哥合し侍けるに風前擣衣

光明峯寺入道前摂政左大臣

衣うつ槌のおとにたつ雨の山にも秋風そふく

里擣衣を

法眼兼誉

妹そとそ今はひ乃里人へいまたよさむに衣うつらん

たそしらす

藤原雅盛

松ふくるゆふさむき嵐にうちなひやこゝは衣うつ也

百首哥たてまつりしとき

内大臣

故郷の月をいくよみよしの山ゆふさむき衣うつらん

秋哥中に

参議雅経

故郷やさらぬ風の夜なよなしみてあれにし里に衣うつらん

嘉元百首哥たてまつりし時擣衣

前大納言俊光

なかき夜に衣うつ也里人のよはむやおなしくなるらん

同擣衣といふ心を

今上御製

いそのかみ秋の初のことにはうちさむの民やたえせし

弘安百首哥よみてたてまつりけるとき

入道前太政大臣

よさむなる浦のあま人こゝろやせに憑て衣うつらん

海邊擣衣を

大江貞重

秋さむくなるをのみれはあまの家にうちもやまぬよそ（本ノ）

前大納言為家人にかはりてよみける日吉社

五十首哥合に　湖邊擣衣

前大納言為氏

ゆく浦やよそにてかはるあま衣しらせさむくなるかねの色

宝治百首歌奉りける時擣衣

皇太后宮大夫俊成女

あちきなくいそちのねよの枕まて夢ちとはるゝ旅

擣衣驚夢といふ心を

伏見院御製

おとろかす旅のかりねはさよ衣うつ程きこえてねの夢

題しらす

遊義門院

こゝろ旅のやとりはよさむにきゝなれしよさむものね覚かな

百首歌奉りし時

よもすから月みる人のいねかてに暁かけてうつころもかな

忠房親王

擣衣をよめる

源邦長朝臣

夜寒ゆへかたしくまての月影よ霜かきはらふ人の衣うつらん

従二位宣子

きけはちかき旅のやとりのとなりこそ秋のね覚はおもひしりけれ

百首歌奉りしとき

前僧正雲雅

ねさめ待く空すみてうつらむ白妙の暁かたにたかうつ衣

弘安百首歌奉りける時

袖のうへに露もうつろふ枕風よ寒きしのはれなをつらん

大蔵卿隆博

のこり香の秋のひかすをかそへてもうつりのほかくこる菊

亀山院御製

性助法親王家の五十首哥に

法眼源承

しろたへの袖かとや見ん月さえてほとよさむにうつる菊

久安百首哥に

皇太后宮大夫俊成

山川の岸の風にあらはれてかりとそみるしら菊の花

延長御時菊合あり

在原真風

菊そむるかさ河のさとかれはてゝ木の間にのこる菊

籬菊を

二品法親王覚助

秋ふかきまかきにはしもをかさねてもおいせぬものと匂ふ白菊

菊枝につけてたてまつらせ給ける

今上御製

山人のてにせし秋をゆつりおきて君かためにと咲る白菊

御返し

法皇御製

行末を長月のきくにみえにかさなるちよを君にゆつらん

重陽の心を

新院別当典侍

行末の齢を重てこゝのへまちに満てめくれさくの杯

題しらす　永福門院内侍

のこりきく秋のひかすをあつめ摘とゝりふくてそ庭摘菊

百首歌たてまつりし時

前関白左大臣　押小路

我袖よ露を添て長月やなかき夜のねまくらしけり

題不知　平時数

長月も長き夜のいつれ荻落かゝる秋のいろされ

祝部成久

下露のそむるはかりにかはすましとみちをも旅のこゝろやまつ

洞院摂政前左大臣

時のまにふれくたのまれ初時雨あきをは人のかはるみちなみ

前内大臣通

そめてけりみむろの山の初紅葉時雨も露も色にまかせて

紅葉一樹といふ事を

前中納言経継

いとゝ猶そめて色こき紅葉はゝこの一もとやまつ時雨けん

題しらす

権中納言為定

玉かとみれはみちのゆくてみれはみちなきちらこゝろへやわけてちらさん

百首歌たてまつりし時

関白内大臣

露時雨いかにそめてかおとは山末まて葉の色に出らん

前参議雅孝

時雨ゆく雲はたえぬひかけてもかさそらの梢を

秋哥中に

権中納言公雄

小倉山ふもとよりもみちして時雨の外の色やまさらん

従三位為信

露霜のさなから山の紅葉ははちしほの色やそむらん

家に哥合し侍けるに紅葉を

修理大夫康季

色ふかきまくれのもみち葉を嵐の世風吹かはに

惜しからす

清原元輔

紅葉はちりくるあきの大井川ゐせきの瀬をみな瀬を

貫之

我庵より遠くのまゝは紅葉はの色をふかくやなしまさるらん

水辺紅葉を

従二位家隆

立田川そのもみちはちりぬまはそこにそこなふ秋のみえけり

嘉元百首哥奉りし時紅葉

贈従三位為子

竜田川こゝろの秋をやいそくらんもみちをはさそふ峯の嵐に

題しらす　藤原為綱朝臣

うちゆくもそれなみちくさにいふにいはぬそその杜風

新院御製

ちる里のふかみちら葉のうちよりも妹乃ひゝすいさまかはせ

永仁元年亀山殿十五首哥に河上暮秋

左大臣

大井川なかれてはやき紅葉まてとゝまらぬ秋の色そみえけり

従二位師継

いくしほよ秋のなこりにそめぬらんくれゆくいそまきのもとかな

暮秋菊といふ心を

伏見院御製

しもふかくまかひゆくも秋のなこりをはみさらにとゝめる菊の花

正和三年九月尽日十首哥に暁惜月

従三位為理

ゆく秋のなこりをしまぬ時雨にもおなしやかなる有明の月

題しらす

後二条院御せい

いつまてとひとしらるゝすゝきにもゆかぬ秋のなこりをそとゝめ

嘉元百首哥にてさかりし時九月尽

前大納言為世

めにみえぬかたをまつとも月やすりけれは秋そくれぬる

久安百首歌に　上西門院兵衛

おしからぬ身とは思へとめくりこん秋の別をおしむらん

後京極摂政内大臣に侍ける時家に十首歌よみ侍けるに秋　前中納言定家

まつ鳴のかはれる秋のくれてゆく日はかりにやかなしかるらん
露わけし庭

続千載和歌集巻第六

冬歌

時雨知冬といへる心をよませ給うける　法皇御製

時雨ゆく雲のたえまにふるまゝに神無月とはしられそめけり

山時雨　院御製

とやまにはけさハ時雨のかゝるとも山は秋とのこるもみちは

題しらす　従二位家隆

神無月時雨とゝもにふりまかふこのはもいまはあらしそめけり

後一条入道前関白左大臣

けさよそとおもひし雲のたえまより月もかはりにふる時雨に
中務卿宗尊親王
りゆく嶺に雲のかゝりて時雨をいそく山の端せ
弘安百首歌たてまつりけるとき
入道二品親王性助
くもるかとたえまよりゆく雲はなほたえて時雨るゝあとなり
百首歌たてまつりしとき
権中納言為藤
空は猶時雨そまされる雲の色ふかく山のみねの嵐
冬歌中に
権中納言親房
ふきすてゝおろす尾上やさそふらん雲吹かへす松の嵐に
後徳大寺入道左大臣
嶺の秋の梢にみえし紅葉の色ぬまでふるとふる村時雨哉
基家本文云実
夕時雨はれゆく山のたえまより村雲わけて出る月かけ
前大僧正實超
さえかへり時雨てすきし浮雲の跡はかくみの山の端の月
月のよこみのをれちるさへくもるなる
法印紹深
紅葉をもはらふ嵐の峰ひとつにしるき月の影そ時雨る

百首哥よませ給ひし時

前大納言俊光

雲のゐるみねは時雨て嵐ふく梢は今そ色ふかくなり

落葉を

参議為明

神無月吹や嵐の山のはの雲にしられてちる紅葉かな

亀山院世をしらせ給ふ御時におりて三首哥

海をへたてゝ紅葉を

前大納言為世

冬のつれなくみえし山もしくれてちる
木の葉

袖乃庭しろくよりみちらすとみえん

道命法師

千々の秋月とはいふねやもみちをおきて風の吹らん

永徳二年十月法住寺殿哥合に閑路落

葉

前大納言隆房

松坂の空なるみちにふみつゝ錦ちらすは袖にまさりてしやは

見しらす

亀山院御製

ちるそ時ふく紅葉の色よ山かけの木の葉もみちにまかせて

弘安百首哥よませ給ひし時

権中納言公雄

かくて錦たつ田の川の紅葉は秋より秋のなれ

宝治百首歌めしけるついてに
後嵯峨院御製
かさゝきのとわたる橋を人めも霜おかぬ秋のよかりやとをはらん
百首歌たてまつりし時
前大納言俊光
霜さえし色とも見えてなかれては海ゆく野へも霜のみそ
神な月の比小白河にまかりて人々十首
歌よみ侍りしに閑庭霜を
権中納言為藤
庭の面に結ふさゝ霜のやへ葎重ても色も人めかれけり

山階入道左大臣家十首歌に寒草霜
津守国助
霜結ふ草のたもとも露落まさる人めもいまや枯なん
冬歌の中に
平政長
かくはかり身にしむ色は都にもなし霜夜の月の光しもせ
百首歌たてまつりし時
右近大将兼季
吹風もゆふさむき冬の夜のあさちか末に月そさえける
題しらす
源清兼朝臣
かく霜もひとつにみえて冬かれのはらのあさちにやとる月かけ

従二位範宗

秋の色はとをさとなかのに霧はれて月そうつろふ岩間の空

法皇御製

嵐山ねりこのねは忘れて吹明月そ嵐よりゆく

後二条院御製

草も木も色ならしむ霧ふりて野山わたりにふける月

百首哥たてまつりし時

権大納言経継

浦ちかきいはほの浪にたちかへりや霧よ月とみるさ

西園寺入道前太政大臣五首哥たてまつり

けふとよみけつかりし時

前中納言定家

今は秋やもと霧たまる秋のひきにもと見ねは波のかけそみる

返し

西園寺入道前太政大臣

たちかへり霧まきは霜ねとひけふかき色そまさる

百首哥たてまつりし時

内大臣

うつくしき絵をみれは浜の高津に志みちて空にはゆる

権大納言実衡

なかゝ波かし風にちてうきわの中をゆきさかゆ

嘉元百首歌たてまつりける時浮千鳥

前参議隆親

なにはかたみちくるしほの千鳥はゆふなみにあまの数よりそみちみなと鳴

西園寺入道前太政大臣住吉社によみてまつる
へき歌とて人々によませ侍りける歌の
中に冬歌

津守国平

たにかはの河風さむき夜のなかに小嶋をさして鳴千鳥哉

冬歌中に

平重村

はえ海つらの浦風とふけてさゆる月に千鳥鳴也

康永元年内裏十五首歌に千鳥を

大炊御門右大臣

はまかけてあかつきちかくなる千鳥浜ちとりうらつたひくも鳴千鳥哉

題しらす

和泉式部

ともしそふかたみとの千鳥こゑきこえてこのよの小夜ふけかたの月

藤原敏行朝臣

霜のをく宵まの月のあかつきを鳴て千鳥の風にまかれぬ

為道朝臣

かは人とふ人のはるまてをしきまてまつ千鳥哉

水鳥を

中務卿恒明親王

さむき夜はなかれもとちていけのかはのをさへもしもや置らん

前中納言定房

山さとやみねにかゝれる雲なくはとものかくれの世にはしられて道
すみかともいはむ心をよませけり

今上御製

あきふかき山のせゝらきむしのねをたえ〳〵河きしのおくにやならん
影しらす

従二位宣子

冬川のうへやむすふ波かせのつらゝにぬれてまくらの月影

従二位行家

夢さめてはいてこそすむ波やまかせのはれし月おきてのそけき

寂蓮法師

紅葉の色こそみえねあらしふくおとにのみこそしられけれ

平時元

いまやはしたやすらひもとむるまのとよむ山のせきもるかな

藤原重継

こゝろすむ波をこえりて溪陰のかのたちむかふ松の嵐

弘安百首歌たてまつりけるとき

入道二品親王性助

露のまのよのはかなさにみをしてもかはらぬ波のたつとも
おもはゆるみを

後二条院御製

おほ木よりさしてふ波をたちまちて八十うちかへしまちつ

白河殿七百首哥に鶉網代といふことを

前大納言為家

網代もるひさしき波のかけしてまつ歌よるも網代木

弘安百首哥奉りける時

入道前太政大臣

かとまつも夜ふかく人もまたぬ夜のよはの風にまきちる

百首哥たてまつりしとき

忠房親王

をのへのあらしおちやまちおもふ今はをちせさへあらしの

冬の哥の中に

前権僧正雲雅

冬の夜におきゐて待てる袖の上に玉やこほりて見えん

前大納言為氏

嵐吹よそのひかけはえたれて雲のおちにあられふる也

弘長元年内裏に百首哥よ暁霰

雲の上に在明の月をしけさえてふるや霰の玉しきの庭

題しらす

藤原為顕

よの中につもりにきし時まてみさりし山の風の白雪

院御製

都より嵐のうちにひとり出て山をみれは雪ふりにけり

澄覚法親王

さそひける志賀のうら風さえそへていさよふなみの氷る宮路て

前大納言為世よませ侍し春日社三十首中に　津守国冬

吉野山しらゆきつもりたにかけの松のはやまも雪のふかさを

題しらす　平時有

されはまた八重の山路もつもる雪にうつもれはてゝみね風寒

冬のひもたゝ絶間なくふりつゝけつゝ

前大僧正道昭

風さむみこほる雲間の月影にほのかにさえてゆくかりのつら白雪

冬歌の中に　法印定為

吉野山さとの嵐とゝもにまたはるかにちるや雪の夕くれ

後二条院御製

いとゝまた冬こもりせるみよしのゝ吉野の里のゆきの夕暮

祐子内親王家紀伊

あまのはらそらにふる雪にほひつゝやまのはみえぬ夕暮の空

中納言家持

かすか川ゆきもよにゝもいかゝしてよしのゝ山のゆきそふるらん

皇太后宮大夫俊成

つもるとてみちはあれとも山里にひとふる雪そとはれぬなりまん

雪満夜といふこゝろを

法皇御製

けふもまたふりつもるらし雪の色のしら夜をなかし

題しらず

兼覚法親王

吹おろす嵐の音も忍の山かけふかくもつもる白雪

嘉元百首哥たてまつりし時雪

前大納言為世

高砂のをのへの嵐ふくからにかさねてふりぬ松の白雪

後九条内大臣家百首哥に歳暮涼雪と云ことを

藤原隆祐朝臣

雪をれのをとにはまくらそはたてゝつもりまさるの庭の松

松雪を

津守国助

とふ人をまつとたのめし庭の面につもるまゝの雪ふかき

雪のあしたを人まみ待けり

前大僧正禅助

ゆきまよふらしとふさへてみちもなきひの白雪

題しらず

津守国助女

しらさきのたつとこそみえ枯の枝にちえぬ白雪

大蔵卿重経

ちえよけくもことそみる白雪のつもりしの梢を

友つりむとみえて梅あされ村ふる下草雪ふりにけり
藤原頼盛

吉野山ふもとにふらぬ雪ならは花かとみてや尋いらまし
西行法師

梅か枝のたもとにふる雪は色ものかは小消えそみえける
相模

山ふかみ梅とまかふとも色とてもみちも雪にまかへつ
大江政国女

永仁二年五十首歌たてまつりける時雪を
津守国助

冬ふかみおとさらにまれなる宮つもりてさむき浦せ
題しらす
藤原宗秀

冬されのあれたる宮にふる雪にこほりもとる浦せ
湖雪混浪といふことをよみ侍ける
前大納言為氏

浦かせに磯の浪とまかふなりみさゝ小ふる白雪
百首歌たてまつりし時
津守国冬

立田川水のうへよりさきて流れ神代もきかぬ雪や(?)ふる
題しらす
よみ人不知

神さひし宮居のしめにゆふかけてたかくとみゆる松のしたをれ

聖廟にてゆきのふり侍けるに
皇后宮

雪はなほ峯のこすゑそあらはれてさむるにこえたる神代ならゝさ

文保百首歌に
二品法親王覚助

冬の夜の月もふけ行まゝに宮のひまもなくみゆる

雪歌の中に
藤原信雅朝臣

まけさえつ絶えもみえぬさての葉のやまのさむさにつもる白雪

西山にすみ侍けるに雪のふりけるに
慈道法親王

清へし代の跡をもあらはれてそのまゝの庭の白雪

嘉元内裏廿首歌に
前関白太政大臣

ゆくさやあけの下みちあすまそふりしくなりに宮の白雪

題しらず
延明門院大夫

はるるよに世をかせてゆふかり竹のはうむけさの白雪

正治二年十首歌合に 暁雪
従二位家隆

ねやのうへにまつやあまねくとふらむはるとくもあけぬる白雪

積雪を
正三位為實

いくへともわきても見えしわか山雲をとをさかるみねの白雪

山階入道左大臣家十首歌に里雪

源兼氏朝臣

ゆきてみしふるさとの雪に跡たえハわすれの里と誰か問ふへき

読人しらす

三善遠衡朝臣

まれにくる人もあとなき庭の面にふみわけかたき雪そつもれる

権中納言公兼経

こぬ人をはさふるこゑ我にしもあとつきてこし庭の白雪

雪のふりけるに跡つけて見えこともなくよ

かきしまとしもやて待けるに人のもとへ

かよひこん人をいさや白雪の跡みぬほかハいかてたのまん

法印長舜

弘長百首歌奉りける時雪

衣笠内大臣

志らぬ道ふみわけぬる人のなさけハ我ちかきまつ庭の白雪

雪歌中に

前大納言為世

ゆきつもりわけくる人よかれハ人もとひこぬ庭の白雪

嘉元百首歌奉りける時雪

入道前太政大臣

志かしこそ人の情もしられけれあまりあはれにふかき

題しらす　津守国夏

白雲のふるみちもなかりけりふもとふ人のつきぬるのたに

百首哥奉し時　昭訓門院春日

ふりしをとはいとはれむと思ふ人の跡もなきゆく庭の白雪

鷹狩の心を　後鳥羽院御製

みかりするかたのゝ小野に風さえてとたちつかれはし鷹の鈴

正治元年新宮哥合に寒夜埋火　前中納言定家

埋火の消ぬかきりをたのめともあとをもさゆるとこそなけれ

百首哥奉りしとき　入道前太政大臣

雲のうへにねまちの月はふけにけりのりの袖をかさねても

歳暮の心を　従二位氏久

惜しむとも思へはいそく年なれはあやなくもおしむゆく年

前左兵衛督教実

月日のうつるいそきにゆくとしはたゝそこにかけてくれぬ年

左大臣

限ある月日のかすにさりともおとろかれぬる年のくれかな

平宣時朝臣

いつとてもいそくかりのみてまたゆく年をおしみけるかな

普光院入道前関白太政大臣

しくれゆくわかのちかひ年ふれは今日そときはの道の
よ
寿元百そむそてさつりし時歳暮

法印定為

空にこそ月日とめくる道のをちもむかしにかへるまつ
えん
甚しらす

八条院高倉

法のみちゆく年のあゆんともおもはれてしらぬてちる
ちる

仁和寺二品親王守覚

一すちにひそそむ善をまつ心なおもひさ
にしわくれ